

新しく飼い始めたミルクィだが、大型犬特有のおっとりとした気性と非常に怖がりの気性を持ったとてもユニークな犬であることに気が付くまで時間がかからなかった。散歩はほんの少しで充分。他の犬や人などには全く興味を持たず、早く家に戻ることだけが頭の中にあるような散歩しかなかった。しかし家の中では典型的な内弁慶。どの部屋へも勝手に入り込み、一番居心地のよいところが自分の場所。暑い時期は廊下のひんやりとした床の上。寒いときには一番大きなソファの上と、自分なりに場所を決めていた。しかもあっと言う間に大きくなり、1年ほど経ったときには40キロを超える堂々たる体格となった。元々使役犬として繁殖されていたので、強靱な体力があるのも問題となった。庭で留守番させると近所に響き渡る遠吠えで不満を現し、ガラス戸を何度も引っかいたため、ガラスは傷だらけ。あるときはとても嬉しかった何かがあったようで、尻尾を思いっきり振ったため、ガラス戸にひびが入るほどの力を発揮。また買物から戻ると、何かを運ばないと気が済まない性格となり、必ず一品は銜えて運ばせるようにした。しかし喜び勇んで卵の入った袋を振り回し、卵が全部われたことがあったり、8本入りのビールの包みを銜えて怪力振りを発揮したこともあった。一番ひどいのは留守番させたときの八つ当たり。紙という紙を全部ボロボロになるまで咬み、散らかしまわって鬱憤を晴らしていた。何度もきつく注意すると、今度は咬み破った紙をソファの隙間に詰め込み、何知らぬ顔をして私たちの帰宅をまっているという、知能的な性格も現れ始めた。お陰でたくさんの本が犠牲になってしまった。そんな難しいようなええ加減なような性格を、家族全員が受け入れ、家族の一員となっていった。怖がりの性格のため、旅行に連れて行くことも、犬のホテルに預けることもできなくなり、ミルクィがやって来た時点で我が家の家族旅行はなくなってしまった。誰かが必ず家にいることがミルクィの心の安定となり、また一番中家の中に押し込めることを避けることで、家の中が無事になったとも考えられる。年齢とともにお留守時の八つ当たりも収まり、また8時間ほどのお留守番も当たり前のようにならなくなった。しかし散歩嫌いは直らず、いつも車の後部座席で息も荒くウロウロしながらドライブを楽しむようになってしまった。しかも相当なスピード狂で車の速度が遅かったり、信号待ちで止まったりすると必ず後部座席から不満の声をあげていた。2時間程度のドライブなら問題なく、時々遠出して色々な所へ連れ出したこともある。しかし、いつも目的地に着いたらすぐに家に戻りたがる仕草で私たちを笑わせてくれた。カフェや食事に同伴させるのが楽しみだったのだが、じっと座ることが苦手で、一度はカフェのイスの上に登り、ギャルソンを慌てさせたこともある。そんな訳で結局カフェのテラスに連れて行くのが精一杯だった。ほとんどの犬は多動症だと言われているが、ミルクィの場合典型的な多動症だったのかも知れない。そんなミルクィが突然旅立ってしまった。10月度の原稿を書き終えた直後、7歳と2ヶ月の短い命の火が消えてしまった。最後のことはいまでも書くことができない。ただただ、家族全員が深い悲しみに落ち込んでしまった。二ヶ月たった今でも、家の中から「おかえり！」と吠えている声が聞こえるような気がするし、食事時には食卓の下に寝そべっておこぼれを狙っているような気がする。食いしん坊で甘えん坊で寂しがり屋でおてんばであわてん坊で・・・そして家族に愛されたミルクィ。私たちもミルクィと出会えて幸せだったが、彼女も幸せだったに違いないと思う。ある人が雑誌に書いていた。「犬が死んだらすぐに次の犬を飼い始めた。すると次の犬の瞳の奥に死んだ犬の面影が見えることがあった。犬を飼い続けている限り、その時手元にいる犬に、以前の犬達が生き続けている」と。確かにミルクィの中にその前に飼っていたテツを感じることもあった。そのテツと一緒に今頃天国を駆け回っていることだろう。いや、やはり天国でも犬嫌いで通しているのかもしれない。数万回の笑いとおこぼれを私たちに与えてくれたミルクィ。彼女と一緒に生活したことに感謝して、このシリーズを終わりたい。ありがとう、ミルクィ！

そしてミルクィの旅立ちから二月近く経った今日、テツやミルクィと過ごした家に鍵をかけてきました。再びあの家に戻ることはありません。ミルクィの旅立ち私たちが家族の新しい旅立ちにもなったのです。しかも新しい家には既に足元に新しい犬が・・・犬好きは続きます。